

「かながわ人づくりコラボ2019」の実施結果の概要

1 開催の趣旨

かながわ教育ビジョン第6章に基づき、「かながわ人づくりコラボ」を開催する。

コラボ2019は、平成30年6月15日に策定された国の「第3期教育振興基本計画」を踏まえ、かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、実効性のある教育施策に資する。

2 開催の状況

- (1) 日 時 令和元年11月2日（土）13:00～16:00
- (2) 場 所 横浜市西公会堂 講堂
- (3) テーマ スポーツを通して個性を認め合う人づくり
～学校現場の活動から～
- (4) 参加者 306名

▼かもえもんとSDGsダーツ



▼ボッチャ体験



▲司会：県立小田原東高等学校放送部
黒澤さん、尾野さん

3 開催の内容

(1) 開会（神奈川県教育委員会 教育長 桐谷 次郎）

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく「心ふれあう しなやかな 人づくり」の取組、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点やかながわ教育ビジョン一部改定の話があった。

また、「ともに生きる社会かながわ憲章」の取組について、話があった。



(2) 講演「オリンピックを目指して得られたもの～五輪メダリストからのメッセージ～」

（日本体育大学教授 東京都体育協会会長 山本 博）

現役のアーチェリー選手として45年間続けている選手生活と、オリンピックでメダル獲得をめざす中での経験及び高校教諭から大学教授の現在の立場から教育者の視点での経験を基に講演をすすめて行く。

アーチェリーを始めたのは中学1年生からで、大学3年生の時にはじめて出場したロサンゼルスオリンピックで銅メダルを獲得した。57歳になる現在においても、東京オリンピ



ック出場に向けて選手生活を続けており、11月12日から14日にかけて行われる1次選考会に参加できる16名にエントリーされた。本日も午前中は練習をしてきておりこの後、練習場に戻り練習を再開する。午前中はきつめの練習をしてきており、練習を再開する頃には、体もよい状態になっていると思う。これも、45年間の競技生活で培った経験からである。

オリンピックという世界の頂点をめざしているときに、勉強の頂点をめざさないということは、あまりにも都合の良い話である。スポーツでトップをめざすならば学業でもトップをめざすハートを持たなければならない。日本は文武両道という言葉があるが、文武分業になっている。アメリカでは、トップレベルの大学からオリンピック選手を多く輩出している。学業とスポーツの両立を国の方針として進めてきている経緯がある。日本でも、大学スポーツ協会ができ、大学生の勉学とスポーツの両立をサポートする体制ができた。

また、4年に1度開催されるオリンピックは選手としてはとても厳しい長さである。そのため、メダルをめざして必死に取り組み、挫折も大きく涙を流す選手も多い。オリンピックに出場する選手は、誰にも負けない綿密な準備とその競技のことを知り尽くしてなければいけない。私はアーチェリーのことは何でも答えられる自負がある。そして、綿密な準備はもちろんのこと、競技本番のときに、どれだけ大胆になれるかがポイントである。準備ができていない人の大胆は無謀になるだけである。

主体的に競技に向かう気持ちを見極めることが大事である。常に選手として見極めるようにしている。勉強もスポーツも目標を達成したらそこでストップしてしまうのではなく、何のためにやっているのか、自ら取り組む目的が重要であり、あるステージの満足を得ても次に進んでいくことが大事だ。私が競技を続けている目的は、未だにできないことをできるようにしたいからである。だからアーチェリーを続けている。そうしたことから、体育の教員として、子どもたちには、できないことができるようになる経験を提供すること、かつこよく言えば、不可能を可能にする経験をさせることが大事だと思っている。そのためにも、バランスよくより多くのことに挑戦してほしい。



(会場からの質問①)

一人ひとり価値観や個性が違う中、自分のベストをめざしたり自分が幸せだなと感じていればよいと思うのだが、なぜ一番をめざす必要があるのか。

(回答①)

頂点をめざしている道のりを経験していく中で、他者に自分の行動を通して何かを伝えることができ、他者との比較を超越できる。7番8番では、他者との比較になる。人の能力は無限であり、一番というのは常に永遠である。どのスポーツも学問も将来にわたっても、今が最高かどうかはまったく保証されるものではないので、頂点をめざし続けることが大事だと思う

(会場からの質問②)

子どもが山本先生の講演を聞きたくて来た。保護者が代わりに質問をする。子どもがアーチェリーをしているが、長く怪我をせず続けるためにはどうしたらよいか。小学校3年生にもわかるように教えてほしい。

(回答②)

道具が体に合っているものかどうかはまず重要。またアーチェリーは、左と右の腕の使い方が違う。人間の体は左右対称なので子どもの頃に、アーチェリーの他、かけっこや水泳なども並行してやると怪我をする可能性が低くなる。あと5分でも10分でも勉強を行うこと。そして得意なことをがんばること。日本は、どちらかというと不得意なことを頑張らせるが、得意なことをがんばることによって、辛いことも取り組もうという意欲がでてくる。

(3) かながわ教育ビジョン一部改定について

(神奈川県教育委員会 教育局長 田中 和久)

国の「第3期教育振興基本計画」の閣議決定や、本県の総合計画である「グランドデザイン第3期実施計画」の策定などを踏まえ、かながわ人づくり推進ネットワークからの提言も参考に、令和元年10月に一部改定した「かながわ教育ビジョン」について、第5章「重点的な取組み」を中心に、その概要の説明を行った。



(4) 教育論議

①実践紹介 (県立保土ヶ谷養護学校 教頭 井上 浩子、教諭 相川 由宇)

近隣学校(権太坂小学校、境木中学校、光陵高校)とのスポーツを通じた交流について井上教頭より発表。あわせて、4年目の取組であるパラスポーツプロジェクトのプロジェクトリーダーの相川教諭より、プロジェクトイベントの取組内容についてスライド及び映像を使用し発表を行った。



②実践紹介 (県立秦野総合高等学校 教諭 盛 健志)

総合学科2年生、3年生の芸術スポーツ系列科目「スポーツマネジメント理論Ⅰ・Ⅱ」「スポーツマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」の授業で生徒が企画・運営やボランティアとして参加するスポーツイベント(南が丘小学校、秦野市内特別支援級の児童・生徒、秦野市高齢者対象のイベント等)の取組についてスライドを使用し発表を行った。



③教育論議

「スポーツを通して個性を認め合う人づくり～学校現場の活動から～」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、実践紹介やパネリストの課題提起をもと

に教育論議が行われた。

(主な意見および感想)

- ・ 山本氏の講演の中で「出来るということはいろんなことができる、できるようになっている、喜びを実感することなのだ。」という話があったが、2校の実践紹介を聞いてこの話のこを感じた。
- ・ 共生社会という視点では、スポーツをツールに交流するというのは比較的入りやすいと感じた。また、ボッチャは重度の障がい者にもできるスポーツであり、初心者でも取り組みやすく、ライフスポーツとして継続できるメリットがある。
- ・ 秦野総合高校は、再編・統合前の秦野南が丘高校の時、すでに近隣学校や市と連携・協力できていたが、それがうまく現在にも繋がっていると思った。
- ・ 保土ヶ谷養護学校の周りは、もともと恵まれた交流環境であり、小学校、中学校、高校があるという利点を今後も生かしていきたい。4年間の取組を、終わらせるわけにはいかないと思っている。また、オリンピック開催に関係なく、共生社会の実現に向けて、今後進めていく必要性を感じている。また、未就学児にもパラスポーツに参加することを広げたい。
- ・ 授業交流では、あまり光陵高校の生徒とは話せなかったが、もっとスポーツ交流やイベントを増やしたら会話などが弾むので、こうした取組を増やしていった方が良いと思う。
- ・ スポーツを通しての交流事業の難しさは、なるべく生徒に任せなければならない。また、任せ方が重要であり、教員がどれくらいの範囲でサポートし、できる限り生徒を信頼して任せることがとても重要だと思う。その線引きの難しさを感じている。そうした中であっても、一番大変なのは、任された生徒の側だと思う。自分たちでイベントを作り上げていく過程で責任を持ってどれだけ主体的に取り組んでいけるかが重要だと思う。



(今後に向けて)

- ・ 共生社会の実現の一環として授業で行ったが、スポーツは地域交流にとっても適していると思う。人間関係を社会的なかわりとするのであれば、そういう授業交流を通じて、何か一つ大きなものを、一緒に協力しながら作る時間は重要である。さまざまな会話をし、一つのものを作り上げる時間や作りあげた時の場の雰囲気などが、より意味のあるものになると授業交流を通じて感じた。
- ・ スポーツを通して色々なことに気づいてほしい。実践紹介にあったが、「気づく」ということは、教育界では大事だと思う。県教育委員会として子どもたちが、社会とかかわる中で思いやる力を育ててほしいと思う。また、こうした経験を通して自己肯定感も育ててほしい。

- ・ スポーツイベントを通して、子どもたちが、社会に参加するきっかけになるのではないか。学校の中だけではなくて、地域や学校とのつながりを築きながら、また違いというものを気づきながら、それをお互いに尊重し合いながら、スポーツ交流をすすめてほしい。神奈川県が進めている共生社会づくりにもつながる。

(5) 閉会（かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 内藤 昌孝）

閉会のことばとして、山本氏の講演では、競技生活46年において三元号（昭和、平成、令和）でメダルを獲得したいという考えのもとで挑んでおり、目標に達するために自己分析をし、綿密な準備をされている。競技生活の中で山本氏の哲学が生み出され、さまざまな人に通じる理念である。



教育論議では、スポーツの可能性や理念の話、そしてスポーツによる充実感、達成感それから負けるときの悔しさこういうことも大事であるとの話があった。

また、かながわ教育ビジョン一部改定に掲げた理念の実現に向け県教育委員会と、かながわ人づくり推進ネットワークが両輪となって、この人づくりコラボの場を活用しながら、県民の皆様と共に共感、協働、連携をはかりたいとの話があった。